

ぶっきょうつうしん しゅうそしんらんしょうにんごうたんえ
「宗祖親鸞聖人降誕会」 5月

じょうどしんしゅう かいそ しんらんしょうにん へいあんじだいまつ きゅうれき きょうとし なんとう いち ひの さと
浄土真宗の開祖 親鸞聖人は、平安時代末の1173年5月21日（旧暦の4月1日）に、京都市の南東に位置する日野の里
たんじょう しょうにん ちちおや ひのありり ははおや きっこうによ おさな とき ま つ まろ
で誕生しました。聖人の父親は日野有範、母親は吉光女と伝えられ、幼い時は「松若麿（まつわかまろ）」や「十八公麿（ま
つ まろ）」とも呼ばれていました。ちなみに「十八公（じゅうはっこう）」を「まつ」と呼ぶのは、漢字の「松」を分解すると「十
八 公」となるからです。この「十八」という漢数字で思い浮かぶのが、「十八番（おはこ）」と得意な芸を呼ぶことです。この「十
八番（おはこ）」は、19世紀に歌舞伎の名跡である市川家が得意演目18番の台本を、立派な「御箱」に保管して大切にしたこと
ゆらい ほか せつ こ あみだぶつ うち すべ すく
が由来であると言われていたが、他の説に「48個ある阿彌陀仏の誓願（せいがん）の内、『いのちあるもの全てを救うという 18
ばんめ ねが と ぬ すく ゆらい せつ
番目の願い』が飛び抜けて優れている」ことが由来になったという説もあります。

あみだぶつ すく こころ じんせい あゆ しんらんしょうにん さい とき ちちおや ひのありり せいじ あらそ
その阿彌陀仏の救いを心のよりどころとして、人生を歩んだ親鸞聖人ですが、4歳の時に、父親の日野有範が政治の争い
やぶ かぞく す しゅつぽん のこ しょうにん おやこ たいへんくる せいかつ よぎ しょうにん さい
に敗れ、家族を捨てて出奔してしまい、残された聖人たちは大変苦しい生活を余儀なくされます。そして、聖人が8歳
になった時には、母親の吉光女も亡くなってしまいます。幼年期にもっとも頼りとする両親がいなくなってしまう聖人は、
さい しゅつけ しょうねん せいねんき ひえいざん むずか ぶっきょうきょうてん まな きび しゅぎょう つづ
9歳で出家し、少年・青年期は比叡山で難しい仏教経典を学び、厳しい修行を続けました。しかし、いっこうに心が穏
ひ おとず わか しょうにん とうじ ぶっきょう ほんのう のが じぶんじしん
やかになる日は訪れませんでした。若き日の聖人は当時の仏教のありかたに、そして、煩惱から逃れられない自分自身にも
ぜつぼう つた なや すえ しょうにん ねんかん す ひえいざん お きょうと まち ねんぶつ どうじょう ひら ほうねんしょうにん
絶望したと伝えられます。悩んだ末、聖人は20年間過ごした比叡山を降り、京都の街で念仏の道場を開いていた法然上人
い かれ だし しんらんしょうにん さいとしうえ ほうねんしょうにん ほんとう おや した ぜんぶく しんらい
のもとに行き、彼の弟子になりました。親鸞聖人は、40歳年上の法然上人を本当の親のように慕い、全幅の信頼をして
いたことが「たとい法然聖人にすかさされまいらせて、念仏して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからず候。（たとえ法然
ほうねんしょうにん ねんぶつ じごく お こうかい そうろう ほうねん
上人にだまされて、念仏をして地獄に落ちたとしても、この親鸞に何の後悔もないのだよ。）」（『歎異抄』第2章より）とい

ことば わ しんらい ししゅう であ よろこ ひととき あいだ ひと すく ねんぶつ
う言葉から分かります。しかし、やっと信頼のおける師匠に出会った喜びも一時の間で、すべての人が救われるという念仏
おし ひえいざん ならぶっきょう げきりん ふ さど るざい ほうねんしょうにん ひ はな ちゅうねん
の教えが比叡山や奈良仏教の逆鱗に触れ、佐渡へ流罪となってしまう、法然上人と引き離されてしまいました。そして、中年・
そうねんき しょうにん かぞく つ るろうせいかつ おく ろうねんき かぞく はな きょうと いんどんせいかつ さい さいご むか
壮年期の聖人は家族を連れての流浪生活を送り、老年期は家族と離れ、ひとり京都で隠遁生活を送り、90歳で最期を迎えま

いっけん ふこう れんぞく じんせい しょうにん ろうじん ほうねんしょうにん おそ
した。一見すると不幸の連続のような人生ですが、聖人は老人になっても、法然上人から教わっ
まちが い よわ にんげん あみだぶつ わたしたちにんげん すく
た「間違いをおかしてしまう弱い人間であるからこそ、阿彌陀仏は私達人間を救ってくれるのだよ」
おし たいせつ おだ さいご むか ふこう めぐ じんせい
という教えを大切に、穏やかな最期を迎えたといえます。「不幸で恵まれない人生である」とやけ
ひたん とき ほとけ ひとびと えん しぜん めぐ
になつたり、悲嘆するのではなく、どんな時でも、仏さまや人々の縁、そして、自然の恵みによつ
わたし い い じんせい ほう だんぜんしあわ がっしょう
て「私」は「生かされて生きている」とよろこぶ人生の方が断然幸せではないでしょうか。 合掌

